Bグループの少年5

第一章　泉座

「暑いな、今日は……」
桜木亮がそうボヤくと、友人、小路明はサンドウィッチをかじりながら相槌を打つ。
「ああ、もう殆ど夏だな」
明もコンビニに行くため外に出たばかりだったので、その言葉には実感がこもっていた。
先日、ちょっとした不幸な出来事の償いとして、亮は明に昼食をおごることになった――それも一週間分だ。
しかし、恵梨花が一日も休まず弁当を作ってきたので、その約束は一度も果たされていない。
そもそもそんな日が来るのか非常に疑わしくなったため、代わりとして、盛大に晩御飯をおごったのが昨晩のこと。
その後、明は亮のアパートに遊びに来た。雑談をして盛り上がり、帰るのが面倒になったので、そのまま一晩明かしたのである。

朝、明が目覚めると亮の姿はなく、どこに行ったのかと寝ぼけ眼で考えていると、亮がいかにも外を走ってきたという体で帰ってきた。
聞けば、早朝に運動するのは日課らしい。
亮はシャワーに向かい、明はコンビニへ朝食を買いに行って、帰ってきたところだ。
頭にタオルを載せ、Tシャツにトランクス姿でおにぎりを食べる亮に、明がふと聞く。
「そういや、今日はどこに行くんだ？　藤本さんとデートだろ？」
「特に決めてない。恵梨花はブラブラしたいそうだ」
「へえ？　昼飯とかは？　まさか、今日も弁当か？」
「それは、流石に今日は休んでもらった。作ろうかって言ってきたけど」
「……すげえな」
恵梨花が弁当を作ってこなかった日を、明はまだ知らない。
ただ、今日ぐらいはさすがに作らないだろうと思い、冗談交じりに聞いてみたのだが、亮が止めなければ実現するところだったようだ。
「ブラブラするにしてもどの辺だ？」
「それは、恵梨花が昼食に行きたい店の近くだろうな、調べとくって言ってたから。待ち合わせもその近くで、今日の朝にメールが来るはずなんだが――来てたな」
亮が携帯を手に取ってメールを確認し、眉をひそめた。

「どうした？」
恋人からのメールを見る顔じゃないだろ、と思いつつ明は尋ねた。
「ああ、待ち合わせ場所がな……」
「？　どこだ？」
未だ眉を寄せつつ、亮は一拍の間を空けて言った。
「泉座」
「……へえ、あの『街』か」
明は意外な思いで、その地の通称を口にする。
亮が言った地名は、ここ二年ほどでグッと治安が向上し、お洒落な店やカフェが出店し始めた、発展著しい場所だ。
最近でこそ昼間なら気軽に行けるようになりつつあるが、昔のイメージが悪すぎて、躊躇する若者は少なくない。実際のところ、依然として夜に出歩くのは危険が大きかった。
二年前、テレビのニュースになるほどの大きな事件があって、それが契機となり、警察も本腰を入れて治安回復に乗り出した。
それでも、比較的真面目な女の子は、夜に近寄ることなどまず考えもしないだろう。
亮と明の通う学校の女の子は大半がそうで、いくら明るい時間とは言え、恵梨花がそこを待ち合わせ場所にしてきたのが、明には意外だったのだ。

「恵梨花って、よく行くと思うか、この辺？」
悩ましげな顔の亮が尋ねる。
明には、亮の考えていることがすぐにわかった。
恵梨花のようなスタイルもいい超美少女が、あの街を、それも夜に出歩くのは、猛獣の檻に投げられた餌も同然である。
単純に心配しているのだろう。
明は率直に思ったことを口にする。
「いや……それは無いんじゃないか？　……行くとしても、昼にちょっとだけとかじゃ？」
「……だよな――にしても意外だな、ここを選ぶなんて」
亮も明と同じ思いだったようだ。
しかしながら、明はふと、それが意外でない理由を思いついた。
「そこはお前と一緒だから、危険も少ないと考えたんじゃ？」
昨日武道場で見た亮の強さがあれば、数人のチンピラなど簡単に蹴散らせるだろう。
「ああ……そうかもな」
亮も納得したようである。
「待ち合わせがあそこなら、さっさと用意して早めに行くか……」
「そうだな、その方がいいだろうな、待たせたら山ほどナンパされそうだし」

「お前もやっぱりそう思うか？」
苦笑した亮は、最後のおにぎりを食べ終えると、ドライヤーで髪を乾かし始めた。
「でも、何で待ち合わせなんだ？　お前、学校行く時は、いつも藤本さん迎えに行ってるんだろ？今日もそうすればいいのに」
「ああ、俺もそう言ったんだがな。何でも、デートとなると待ち合わせがしたいんだとよ」
ドライヤーを当てながらの亮のそんな言葉に、明は小さな声で突っ込んだ。
「……倦怠期の夫婦かよ」

◇◆◇◆◇◆◇

待ち合わせ場所は、泉座の駅前の広場にある時計台である。
明とは一緒にアパートを出て、当然ながら途中で別れている。
この街に来る時はいつも違う駅から来るので、少し手間取ってしまったが、亮は待ち合わせの二十分前に到着できた。
付き合う前の、成り行きでデートになったあの日の待ち合わせでは、恵梨花が先に来ていたことから、十分前では遅いと思ったのだ。
「……あっついな、今日は本当に……」

朝、運動しに外へ出ていたので暑いのは知っていたが、早朝は今ほどではなかった。
時間は九時四十分。雨が降る気配も曇る様子もないことから、今日はこれからどんどん暑くなるだろう。少々、気が滅入りそうになる。
しかしながら、梅雨にはまれな晴天であることは間違いなく、絶好のデート日和と言える。
待つこと五分、早々と汗を流し始めた亮が、恵梨花が来たらまず冷たいものでも食べに誘おうかなどと考えていると、待ち人の気配を感じた。
「ごめん、亮くん、待たせちゃったー？」
振り返ろうとしたところで、息を弾ませた恵梨花の声が聞こえてくる。
「いや、さっき来た……とこ……」
体の向きを変えながら、亮は常套句を口にしようとする……が、尻つぼみに声が小さくなった。
何故か――。
恵梨花が魅力的な格好をしていることも要因の一つだろう。
今日の恵梨花は白いミニのワンピースを着ている。裾からは黒のホットパンツが覗き、その下は黒いニーソである。
白いワンピースの袖からチラ見えする二の腕と、黒&黒で強調された絶対領域が非常に眩しい。
「早かったんだね、いつ来たの？」
「……」

笑顔で見上げてくる恵梨花に、亮は言葉を返せない――まるで口の開き方を忘れてしまったかのように。
「……？　亮くん？」
恵梨花の私服姿を見るのは今日で二度目だが、前回と同じく、いつもより可愛く登場するのは間違いないと思っていた。
その予想は当たった。しかしながら、たった一つ、予想と違うことがあった。
「ねえ、亮くん？」
「……」
「も、もしかしてこの格好おかしかった？」
未だ絶句している亮に、恵梨花が大いなる勘違いをして、オロオロと焦り始める。
「お……」
ようやく口を開いた亮だが、言葉にならない。
「……お？」
小首を傾げ、恵梨花の後頭部にある髪が揺れる。
そう、後頭部、である。
恵梨花の今日の髪型は、黒いシュシュで後ろをまとめ、そこからウェーブがかった髪が流れている。つまりはポニーテール――亮の一番好きな髪型だった。

剣道部の成瀬千秋のように、綺麗な尻尾の形をした、純正のポニーテールではないかもしれない。
しかしながら、これもポニーテール。恵梨花にとてもよく似合っており、そして――とてつもなく可愛く見える。
「お……」
「お？」
一音しか発しない亮に困惑しながら、つい、といったように復唱する恵梨花。
初めて好きになった女の子が、交際している彼女が、自分の一番好きな髪型をしている――まあ、よくあることだろう。
しかし、亮にとってはこれが初めてである。
そんな「初」を目にした亮がどうなるかというと――。
「おおおっし!!」
拳を握りしめ、大声を上げながらガッツポーズをとった。
そんな突然の奇行に、恵梨花は訳がわからず目を丸くする。
――亮のテンションが、かつてない高みへと到達した瞬間であった。
恵梨花は目の前にいる、彼氏の突然の咆哮に目をパチクリとさせた。
「え、えっと、ど、どうしたの、亮くん？」

激しく動揺したまま問いかけると、亮は感極まったような顔を向けて来た。しかし恵梨花の問いには答えず、しみじみと首を振るだけである。
「りょ、亮くん？」
いつもとはいろいろ様子が違う。どこかおかしい、と言った方が正しいか。
「えーっと、亮くん……？」
再度の問いかけに、亮がやっと反応する。
「……いいな、それ！」
鼻息も荒く、拳を握ってそんなことを言った。
「えっと……な、何が？」
「それ」と言われても、亮が異常をきたした原因は特定できず、恵梨花の混乱は深まるばかりだ。
すると――。
「何が、だって!?」
亮は信じられないと言わんばかりの顔で、絶叫したではないか。
「う、うん……」
おかしい。やはり、今日の亮はかなりおかしい。
「それだって、それに決まってるだろ!?」
ハッキリと言ってくれればいいのに、また「それ」と連呼する。

いつもはこんな回りくどい、わかりにくい話し方をする亮ではない。少なくとも自分に対しては。
となると、今の亮はやはり異常なのだ。いつもの配慮を忘れてしまうほどに。
もう一度尋ねてみて、再び「それ」だとか、要領を得ない回答だったら、自分までおかしくなってしまうかも……と思った恵梨花は、動揺しながらも考察してみる。
亮の目線は、先ほどから自分の首の上で固定されている。
そうだ。よくよく思い出してみれば、昨日亮が漏らした本音を聞いて、自分は今日、いつもと違う髪型にしているのだった。
「も、もしかして、この髪型……？」
すると正解だったようで、亮は大きく、そして力強く頷いた。
「ああ！　すげえ似合ってるな!!」
「あ、ありがとう……」
お世辞でないことはわかる。喜んでくれているのもわかる。わかるが、恵梨花は頬が引きつるのを止められなかった。
「いや、何だ、本当……本当に似合ってるな!!　めちゃくちゃ可愛いぞ、恵梨花!!」
「……あ、ありがとう」
恵梨花は顔が真っ赤になるのを自覚しながら、先ほどと同じ言葉を繰り返すことしかできなかった。

少し上半身を後ろに引いてしまったとはいえ、嬉しくない訳がない。
大好きな人が、嘘偽りが欠片も見えない顔をして、嬉しさの上に興奮まで滲ませ、自分のことを可愛いと褒めちぎってくれているのだから。
しかし、ここまで言ってくれるなんて、予想外だった。
むしろ予想外過ぎて、リアクションに困ってしまう。
亮が喜んでくれているのは間違いない。その喜びのせいでテンションが高くなりすぎて、おかしくなったのだろう。
（ああ、梓がいてくれたら……）
そう思わずにいられない。きっと彼女なら、今の亮を冷静に分析してくれるのに。
もっとも、付き合ってから初めてのデートに付き添われても、それはそれで困るのだけども。
――などと考えていると、尚もテンション高く亮が言った。
「恵梨花、ちょっと写真撮っていいか？　いや、撮らせてくれ！」
「え？」
恵梨花の返答を待たずして、既に携帯のカメラはこちらに向けられている。
どこかの誰かさんのような早業である。
「え、いつの間に!?　ちょ、ちょっと亮くん!?　どうせなら一緒に――」
「いいや！　今の恵梨花の横に、余計なものを写したくない！」

「亮くんって、余計なもの!?」
「とにかく一枚、恵梨花だけのを撮らせてくれ！」
「あ、後で一緒に撮ろうね……」
恵梨花は諦観を含んだ声で、呟くように返した。
ここまでおかしな、そしてテンションの高い亮は初めてである。
いや、少しだけ思い当たる点もあった。
初めて亮の教室に弁当を持っていき、それを見せた時だ。あの時も予想外のテンションの高さであったが……今ほどではないだろう。
亮はテンションの高さに比例して、どこかおかしくなるのかもしれない。
恵梨花はこのことを深く胸に刻みながら、亮の「はい、チーズ」の合図を聞き、反射的に――しかし義務的ではない、嬉しさを含んだ笑顔をしっかりとカメラに向けた。
撮り終えた亮は、「うむ」と満足そうに頷きながら、携帯を眺めている。
やはり亮がおかしくなったのは、恵梨花の自惚れや勘違いでなく、今日の自分の髪型を見て喜んでくれたから、と考えて間違いなさそうだ。
前みたいに時間が経てば、また元に戻るだろう……きっと、多分、恐らく。
恵梨花は亮の状況を把握したことで落ち着いてきた。
そうすると今度は、褒められたことに対する嬉しさ、恥ずかしさが洪水のように押し寄せてくる。

しかし、今はそれに浸っている場合ではない。
今の亮なら、質問すれば何でも素直な答えが返ってくるだろう。
そばに寄ってから一応、確認してみる。
「ね、ねえ、亮くん。本当にこの髪型、似合ってるかな……？」
すると亮は、「何を馬鹿なことを」と言いたげな顔で振り向いた。
「何言ってんだ!?　これだけ似合う人間が他にいるのか!?」
「――いや、いない！」と、言ってもいない言葉が聞こえてきそうな勢いであった。
「あ、ありがとう……えっと、じゃ、じゃあ……亮くんって、この髪型――ポニーテール好きなの？」
これも間違いないだろうが、念のため、確認しておく。
「ああ、一番好きな髪型だな」
視線を携帯の画像に戻しながら、力強い声が返ってきた。
「そ、そうだったんだ……。本当に一番だったなんて……」
後半はボソッとした独り言だ。
ハッキリ言って、嬉しい情報である。昨晩の電話で梓もそう断言していたが、やはり間違いなかったようだ。
「じゃ、じゃあね、前にして見せた――サイドポニーは……？」
「あれも恵梨花に似合ってたよな……そっちは二番目だな」

「二番目……」
付き合う前の初デートの時の髪型があれで本当によかったと、恵梨花は心から思った。
このまま三番目、四番目と聞いていきたいところであるが、亮が正気に戻る前に、是非確認しなければならないことがある。
「そ、それじゃあね、この――ポニーテールが好きなら、毎日した方が……亮くんとしては嬉しかったりする……？」
梓がいれば、「ここぞという時にその髪型にしなさい」と言うかもしれないが、亮が喜んでくれるのならば、恵梨花はそうしたかった。
すると反応は劇的であった。
亮は「その手があったか⁉」と言わんばかりの表情で、携帯から恵梨花へガバッと顔を上げた。
その勢いに驚き、恵梨花のポニーテールがビクッと揺れる。
「そりゃあ、毎日見れるなら！　つまりは、学校で……も……？」
大きく頷きかけた途中で、表情に迷いの色が浮かんで止まる。
「……？　どうしたの？」
「ああ……いや、駄目だ。学校では……だから、毎日はしなくていい……いや、しない方がいい……他の連中にまで……」
最後のあたりは恵梨花から視線を外し、小さな独り言のように言ったので、恵梨花にはよく聞こ

えなかった。
「？　しない方が……いいの？」
「あ、ああ……学校ではしなくて……い、いいっ……！」
亮は歯を食いしばり、その決断が断腸の思いであることを感じさせる。
「？　わ、わかった……」
「ああ……」
先ほどまでのテンションはどこへやら。亮は「はあ……」と、悲嘆に暮れたようなため息をついた。
これは自分の質問のせいなのだろうか。恵梨花は焦りを覚えつつ、先ほどから思っていたことを口にする。
「え、えっと、亮くんもやっぱり、その髪型格好いいね！　久しぶりに見れた！　服装も似合ってるよね！」
これは恵梨花の本心である。
今日の亮の髪型は、学校で見る全体的に髪が寝そべりどこか気の抜けたようなものでなく、以前のデートで見た時と同じで、ところどころ毛が撥ねて立っている。
服装は黄色の半袖のパーカーに、白のインナー、下はブラックのジーンズだ。
「髪型はこっちのが楽なだけなんだが……服装って……そうか？　……今日の恵梨花ほどじゃねえと思うけど」

亮が自分の服装と、恵梨花を交互に見て首を傾げる。
亮も似合っているのかもしれないが、割りかし普通で、恵梨花ほど気を使っていないのは確かである。
しかしながら、恵梨花の目には補正がかかっているため、学校での姿の倍以上に、亮が格好良く見えてしまうらしい。
「ふふ、そんなことないよ。この服似合ってる？　前に梓と買い物に行って、買ったばかりなんだ……亮くんのその髪型って、学校のより楽なの？」
「ああ、ドライヤーで適当に乾かしたらこうなる。癖がひどいところだけ、ワックスで押さえる感じで」
「そうなの？　じゃあ、学校のは？」
「あれは、ドライヤーで無理矢理寝かせててな、トータルではあっちの方が時間も手間もかかる」
意外なことに恵梨花は目を丸くする。学校の時の方が、何もしていないと思っていた。
「亮くんって、もしかして、くせっ毛なの？」
「ああ……寝癖もひどくてな。だから朝は、頭全体を水で濡らしてからの方が、いろいろと捗る」
一連の面倒臭さを思い出したのだろう、不貞腐れたように頭をガシガシと掻いている。
その様が何か面白くて、恵梨花がクスリと笑う。
「そんなに面倒なら、学校でもその髪型にしたらいいのに……」

（そうしたら、亮くんのことを地味だって言う人も減って、それに、格好いいと思う子だって……っ!?）
そこまで考えた恵梨花は思わず叫んでしまった。
「やっぱりダメッ!!」
突然のことに驚き、ビクッと上半身がのけぞってしまった亮である。
「な、何がだ？」
「髪型のこと！　今言ったことは忘れて！」
「今言ったことって……この髪型を学校ですることか？」
「そう！　しないでね！　ね!?」
詰め寄る恵梨花の剣幕に押され、亮はコクコクと頷いている。
「あ、ああ……って、今更髪型変えて行く気もねえしな」
「本当に!?」
「あ、ああ、本当だって」
「そう……」
亮の返答に恵梨花は安堵の息を零した。
危ないところであった。
もし、学校の女の子がこの髪型をした亮を見て、格好いいと思い、そこから好きになったりでも

したら、ライバルになってしまうではないか。
それによくよく考えてみると、この亮の姿を見られるのは、そして見たことがあるのは、亮と同じ中学出身である千秋などを除けば、自分だけなのだ。
この特権を他の人に与えるのも何か嫌だった。
と、そこまで考えたところで、一つ閃く。
「あ」
「？　どうした？」
「あ、ううん、何でもない……」
「そうか？」
さっき亮が、自分がポニーテールで学校に行くのを止めたのは、もしかしたら同じようなことを考えたからではないのだろうか。
そうだとしたら、これは独占欲の表れである。
そういったところを滅多に見せてくれない亮なので、恵梨花からしたらちょっと、いや……かなり嬉しいものがあった。
恵梨花は頬が緩んでくるのを抑えられず、誤魔化すように口を開く。
「ねえ、もう行こう？　いつまでも、こんなところにいないで」
「ん、ああ、そうだな……待ち合わせ場所から動かないのもおかしな話だな」

頷いて歩き出す亮の隣に恵梨花も並ぶ。
ふと、亮の言葉から前回のデートの記憶がよみがえり、恵梨花は茶目っ気たっぷりに聞いてみた。
「……ねえ、亮くん、前にも似たようなことありませんでしたっけ？」
「あー……」
亮も思い出したのだろう、苦笑している。
前のデートの時、会うなりお互いを褒め合って、変な空気になったことがあった。今日も似たようなことをしている。
「そういえば、そんなこともありましたな」
恵梨花の茶目っ気に乗って、無駄に厳しい顔を作って頷く亮。
「やっぱり、亮くんもそう思われましたか」
恵梨花も似たような顔つきをして、亮を見上げた。
そして目が合うと、少しの間を置いて、だしぬけに崩れる二人の表情。
「くっく……」
「ふふっ……」
そして堪えきれずに、二人はその場で大笑いしたのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

「穴があったら入りたいとはこのことか……」
正気に戻った亮の、浮かれていた己の所行を悔いた言葉である。
思い出したくもないが、つい先ほどのことなので、自分がどれだけ興奮状態にあって、どれだけ恥ずかしいことをしていたか、鮮明に記憶していた。
それけでもキツいところだが、問題はその原因たる隣を歩く恵梨花だ。
横目で見ると、恵梨花は亮とは反対方向へと顔を背け、肩を小刻みに震わせている。
普段は見えない、真っ白なうなじが目に飛び込み、つい目がそこへ行きそうになるのを、意思の力を振り絞って元に戻す。
（やばい）
この一言に尽きる。
ポニーテールで武装した恵梨花は、尋常ではない破壊力を有している（特に亮に対して）。
有り得ないぐらい可愛く、目が合うと最近はあまりなかった緊張がどっと押し寄せてきそうになり、それを抑えるので精一杯なのである。
亮は臨戦態勢を整えるように、深呼吸をした。
「オッホン」
ワザと大きめの咳払いをして、恵梨花の注意をこちらに向ける。

「……っふ、ふふっ……」
亮の意図することが伝わったようで、恵梨花は笑みを零しながら正面を向いた。
「えーっとだな、恵梨花」
「ふふっ……おほん！　何？」
ここでの恵梨花の咳払いは、笑いを無理矢理抑えるために違いない。しかし、口元に手を当てているあたり、抑えきれてはいなかった。
亮はやりきれない気持ちになりながら頭を掻く。
「さっきのことなんだがな……」
「うん」
「まあ、なんだ、記憶から消去してくれたら助かるんだが……」
「ええー」
恵梨花が殊の外、残念そうな声を出した。しかし、瞳は悪戯っぽい光を放っている。
「あんなに亮くんが褒めてくれたことを忘れろって言うの？」
そんなことを言いながら、からかい混じりの笑みで見上げてくる。
「……ぐ……」
そんな恵梨花が可愛いやら恥ずかしいやらで、亮は顔を赤くし、更には上手く口が回らず変な呻き声を漏らした。

「ぜ、全部、忘れろとは言わんが、その、俺がちょっと……舞い上がってたことなんかは忘れてもらいたい」
そんな情けないことを言うと、恵梨花は噴き出すのを堪えきれなかったようで、口を手で抑えながら顔を背けてしまった。
再び静かに震える恵梨花の肩。
「……オッホン！」
再度の亮の咳払いで恵梨花は、目元を拭いながら前を向いた。
「……ふっ……うん、ちょっと？　……ね？　はい、わかりました」
楽しげに震える声でだが、一応は了承してくれた。
（穴はないのか……）
つい目で、隠れられる場所を探してしまった亮である。
しかし、そんなもの見つかるはずもなく、亮は話題を変えることにした。
「そ、そういえば、恵梨花って、この辺によく来たりするのか？」
これは今朝のメールで、待ち合わせ場所をこの街――泉座に指定してきた時から、気になっていたことである。
「え？　ううん、今日で……二回目かな」
その返答に、つい安堵の息を零す。

「そうか……わかってると思うが、夜に近づくような真似はするなよ？」
「それはもちろん……ね。この辺も落ち着いてきたらしいけど……夜は怖くて来れないよ」
「ああ。来ないで正解だな」
「亮くんは……？　この街によく来るの？」
「……よく来るように見えるか？」
肩を竦めてそう返す亮に、恵梨花は眉を寄せ「う～ん」と唸る。
「わかんない」
小首を傾げたその仕草に、何故だか笑いそうになった。
そして恵梨花を疑った訳ではないが、返事を聞いて亮は更に安心する。
街によく来る人間には特有の雰囲気があるため、慣れた者ならばそれを嗅ぎ分けることができる。
そのことから、恵梨花の返答の「わかんない」は、街に慣れていないことを示している。
街に慣れているなら、「見える」か「見えない」かの二択で答えるだろう。
「そうか、俺はたまに、だな……月に一回あるか、ないかぐらい」
「そうなんだ……来る時って、夜？」
「ああ」
「そっか……まあ、亮くんなら大丈夫だよね」
「ああ、そっちの心配ならまったく無用だ」

そっち、とは無法な若者達の暴力である。
「うん。私が言えた立場じゃないと思うけど、だからと言って、無闇に喧嘩したりしちゃダメだよ？」
「失礼な、俺は自分から素人相手に喧嘩ふっかけるような真似はしねえぞ」
「うん、よろしい」
満足気に頷く恵梨花。
その言い方がまたどこかのお母さんっぽくて、亮はつい笑ってしまった。

それから二人は、適当に街中をブラブラと歩いた。
恵梨花はこの街に慣れておらず、どこにどんな店があるかも詳しく知らない。
亮はたまに来るとは言っても、夜に男友達と飲み食いするのが目的なので、知っている店など限られている。
当然、女の子を案内するようなところなどわからない。
わかるのは、自分の知っている美味いラーメン屋や焼き鳥屋へ、付き合って初めてのデートで連れて行くべきではない、ということぐらいだ。
結局、二人とも詳しくないということなので、とりあえず街を散策してみることにした。
普段は夜にしかこの街に来ない亮が、明るい時間に歩いて一つわかったことがある。
この街は昼と夜とでは、見せる顔がまるで違うということだ。

立ち読みサンプル はここまで

昼の治安がよくなったとは聞いていても、昔のイメージが悪過ぎて、いまいち信じられなかった。
しかし、歩いてみるとそれがよくわかる。
ふと視線を動かせば、女の子だけのグループが楽しげに談笑しているのが見える。
それも如何にも街に慣れている、といった感じではなく、普通の女の子達だ。
ちょっと前まではなかなかお目にかかれなかった光景だろう。
お洒落な店も増えていて、昼の光景だけを見ていれば、普通の若者が集まる街のようだ。
「治安がよくなったってのは、本当だったんだな……」
亮がしみじみと呟くと、恵梨花が不思議そうに問い掛けた。
「？　亮くん、たまに来てるんじゃないの？」
「俺が来るのはいつも夜だからな」
「……やっぱり、夜と昼じゃ全然違う？」
「ああ、全然違う。正直、驚いてる」
「へえー……夜はやっぱりまだ危険なの？」
「まあ……でも昔ほどじゃないだろうな」
「そっか……あ、ねえ、あのお店、何かの雑貨屋さんかな？　行こ？」
楽しげに駆け出す恵梨花に、苦笑を浮かべて亮も後に続いた。